最終日まで接戦、昨年の雪辱を果たす
第65回上南戦、2年ぶりの単独総合優勝

第65回上南戦(上智大学・南山大学総合対抗運動競技大会)が、南山大学を主会場として7月5日から7日にかけて開催され、熱戦を繰り広げた。上南戦は1960年の第1回大会から半世紀以上続く伝統のスポーツ対抗戦であり、両大学で1年ごとに会場を入れ替えて実施している。上智大学で行われた前回大会では、引き分けによる両校総合優勝となり、4年連続の本学単独総合優勝が途絶えた。今年度は気持ちを新たに「Regain」をスローガンとして掲げ、強い上智を取り戻すべく、各団体や関係者が一段と奮起して挑む大会となった。

6月に行われた前哨戦では南山大学が優勢の結果となったが、大会初日のハンドボール、ラグビー、硬式野球の全てで勝ち星を獲得。特に6年ぶりとなる硬式野球での勝利は、本学に勢いをもたらした。

2日目は南山大学の粘り強い猛攻が続いたが、この日深夜の最終試合となったアイスホッケーでは見事勝利し、翌日に弾みをつけた。ここまでで本学側の13勝12敗となり、両大学のプライドを懸けた熾烈な優勝争いは最終日までもつれ込んだ。

最終日には、上南戦実行委員長の瀬山大稀さん(法国3)が所属する卓球部が男女ともに勝利。両大学譲らぬ試合展開が続いたサッカー部も、PK戦の末6年ぶりの勝利を収め、総合成績は16勝14敗となった。多くの感動と出会いを生んだ大会は、本学が昨年の悔しさを晴らす、悲願の総合単独優勝達成という形で幕を閉じた(通算成績40勝17敗6引分)。

また、例年に続き文化団体の交流を図る「Johnan Meets EXPO 2024」も同日程で開催。「戦わない上南戦」として、合同ライブやワークショップ、両大学の類似団体同士による交流企画などが開催され、互いに親睦を深めた。

選手たちへエールを送る応援団

7年ぶりの劇的勝利となった男子ラクロス部

サッカー部はPK戦の末に勝利

大会後には、上南戦での活躍をたたえ、上南戦学長賞と特別賞が発表された。受賞団体・受賞理由は次のとおり。

上南戦学長賞

▶男子ラクロス部:接戦の中、サドンビクトリーの末に7年ぶりに勝利した。

▶ソフトテニス部(男子):最後の1ペアで5ペアに連勝し、昨年の敗北の雪辱を果たし勝利した。

▶硬式野球部:6年ぶりに勝利し、上智の勝利を勢いづけた。

▶サッカー部:両チーム拮抗した展開でPK戦の末、6年ぶりに勝利し単独優勝に貢献した。

上南戦特別賞

▶応援団:猛暑に負けず精力的に各部を応援し、大会を盛り上げた。

ひと

パリ五輪にパラオ代表として出場
美しい海原で鍛えた泳ぎを発揮

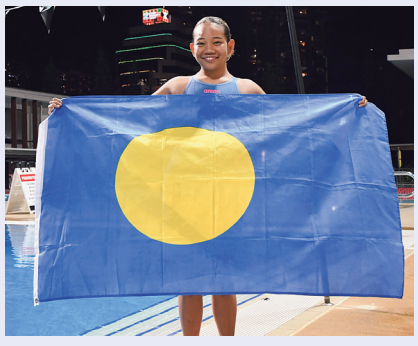
7月から開催中のパリオリンピックに、競泳女子50m自由形のパラオ代表として出場を果たした学生がいる。パラオ人の父と日本人の母を持つホセイ有栞(ゆり)さんだ。

太平洋に浮かぶ自然豊かな島国、パラオ共和国。ダイビングの聖地の異名を持つほど、その海は透明度が高く美しい。「パリでは自己ベストを狙います」と話すホセイさんのアグレッシブな泳ぎは、日本からはるか3,000km離れた故郷の青海原で育まれた。

ホセイさんは6歳から18歳までパラオで過ごした。「家のすぐそばには海があり、泳ぎながら魚を釣って遊んだり、ビーチで友人と話したり、日常生活の一部と言っていいほど海は身近な存在でした」

8歳からコツコツと水泳を続けてきたホセイさんに転機が訪れたのは21年。世界水泳の選抜メンバーとして声が掛かった。「国を代表して泳ぐという責任感やプレッシャーが、自分にとって良い刺激となりました」

しかし、パラオの練習環境は、他国と比較しても整っているとは言い難い。「パラオには競泳用プールが1つしかなく、使えない時は海で練習することになります。波や潮の流れに押し戻されながらも、50m先に浮いたブイを目指してひたすら泳いでいました」


SPSF※総合人間科学部教育学科1年
※Sophia Program for Sustainable Futures
ホセイ有栞さん

荒波にもまれながら練習を重ねた甲斐あって、世界水泳でも結果を残せた。「タッチ板と呼ばれる競泳用のタイム計測器を初めて使ったら、自己ベストが3秒も伸びたのには驚きましたね」

23年9月に進学した上智大学では、即決で水泳部に入部した。「日本の競技レベルはパラオよりも高く、技術面や精神面でも学ぶことが多いです。日本での新生活にも慣れてきた頃、パラオにいる母親からオリンピック出場決定の報告を受けました。パラオで支えてくれた方々への感謝の気持ちと、日本で出会った新たな仲間との絆を胸に、世界の舞台で泳げる嬉しさを感じながら力を出し切ります」

2020東京パラリンピック出場選手と学ぶ
車いすフェンシング体験会

6月9日、特別ゲストに2020東京パラリンピックに出場した加納慎太郎選手を招いた「車いすフェンシング体験会」を四谷キャンパスで開催した。本イベントは、ハンディキャップを抱えた人々の視点からスポーツを体験することでマイノリティへの理解促進を狙うと同時に、スポーツへのアクセスが少ない身体障がい者にパラスポーツという選択肢があることを認識してほしいという目的から、本学フェンシング部が企画し、一般社団法人日本パラフェンシング協会と、公益社団法人東京都障害者スポーツ協会の協力により実現。本学学生や教職員など約90人が参加した。

冒頭、加納選手がパラスポーツとの出会いや東京パラリンピック出場時の様子を紹介し、パリパラリンピックへの意気込みを語った。

続いて、加納選手と外国語学部フランス語学科卒業生で公益社団法人・日本フェンシング協会常務理事、フェンシング部名誉OBの和田潔氏、マイノリティ研究を行う本学学生によるパネルディスカッションを実施。マイナー・スポーツであるフェンシングおよびパラフェンシング普及や日仏のパラスポーツ比較などについて議論した。

障がいの有無や国籍、年齢を超えて
パラフェンシングを楽しんだ

最後に、フェンシング部員によるデモンストレーションのあと、参加者同士でパラフェンシングを体験。参加者の多くが初めて剣に触れるフェンシング未経験者だったが、東京パラリンピック出場経験のある加納選手との対戦を楽しめる貴重な時間となった。

同イベントを主催したフェンシング部の副主将兼男子部部長で、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の学生職員でもある吉岡聖都さん(外葡3)は、「今後も、よりインクルーシブなキャンパスづくりを、学教職の『ALL SOPHIA』で目指していきたい」と振り返った。

上智浴衣デー2024
夏のキャンパスの風物詩として開催11年目

7月12日、四谷キャンパスで「上智浴衣デー2024」が開催された。小雨の降る中での実施となったが、学内は浴衣姿の学生たちでにぎわった。

浴衣デーは、留学生に日本の伝統的な文化を体験してもらうことや、学生と教職員の交流を通して、キャンパス内でのコミュニケーションが活性化することを目的として、2013年に創立100周年記念企画として始まり、今年で11年目を迎えた。主催は、イベントの企画や運営を行う課外活動団体nexnect。

終日、ホフマン・ホールなど学内に数カ所の着付け部屋を用意。11号館ピロティでは浴衣販売が行われ、購入した浴衣をその場で着付けてもらう留学生の姿も見られた。

6号館1階には言語教育研究センターとの共催で短冊に願い事を書く笹飾りを設置。さまざまな言語で書かれた短冊が笹の葉を彩った。同じフロアには、華道部による生け花も並び、笹飾りや生け花を背景に友人と写真を撮り合う姿が見られた。

6号館前広場では、昼休みにあわせ射的や輪投げで日本文化体験ができる「縁日」のコーナーを企画。終了間際まで大勢の参加希望者が列をなした。夕方からは同じ場所で、New Swing Jazz Orchestraによる管楽器演奏も披露された。

留学生たちが多く集まっていたのがホフマン・ホール周辺だ。館内の和室では、書道と茶道体験を実施。浴衣姿の留学生たちが、書道部員の手本を見ながら真剣な手つきで葉書に文字を書き写していた。

上智浴衣デー2024代表の松本莉奈さん(SPSF総社2)は、「あいにく雨天での開催となりましたが、多くの学生が参加してくれました。恒例の企画に加え、今年初の試みとして、PRONTに直接交渉し、『さくら抹茶ラテ』を特別に販売しました。少人数で大規模なイベントを運営するのは毎年大変ですが、メンバーが全力で準備に取り組んでくれたおかげで、雨の中でも成功裏に終えることができました」と話している。

雨にも負けず多くの学生が浴衣を着用

松本さん(写真中央)と運営メンバー